

2012年度海外研修旅行の報告

森 光弘・藤田英樹・林 文明・木下 茂・松浦克至

1. はじめに

本学では、キャリア科目として2009年度から海外研修Ⅰを開講している。内容は学生の人材育成を兼ねたもので、毎年夏季休暇中に希望者を募り海外への研修旅行を実施している。研修旅行先の多くは、2000年より本学提携校となったイタリア国立フェラーリ工業専門学校（IPSIA A'Ferrari以下IPSIAとする）が所在するイタリアに行っており、イタリアへの海外研修旅行は今年で12回を数える。

本年度は、ヨーロッパの文化と自動車に触れる旅と題し、ドイツとイタリアを訪問した。

本稿では、2012年に行われた海外研修旅行について報告する。

2. 研修旅程

海外研修旅行については、提携校であるIPSIAへの訪問及び、イタリアの自動車産業の見学を中心とした研修を主に検討した。

研修旅行の日程を、2012年8月29日（水）～9月5日（水）の6泊8日に決定した。その理由として、9月6日から始まる追再試験を考慮したためである。この日程の問題点として、9月1日、2日が土曜日、日曜日となり、バカンス明けの仕事始まりは、9月3日であるため、マラネロでの研修予定を3日に集中する必要があるがあった。また、例年研修の中心となっていたフェラーリ社の工場見学は実施が確定ではないことから、募集時点では不確定要素を除いた形で募集を進めることとした。

研修先として北イタリアとその周辺国を選択した矢先、5月29日にモデナで地震が発生し、かなりの被害がでたことをニュースで知った。その後の情報収集により、フェラーリ社周辺には被害のないことが分かったが、震災に係るリスクを避け、今年度はドイツのシュツットガルト、ミュンヘン、イタリアのローマとヴァチカンを訪問することとした。その研修内容は表1に示すように、IPSIA訪問、フェラーリ博物館、ランボルギーニ博物館、エンツォフェラーリ生家博物館、ベンツ博物館、ポルシェ博物館、BMW博物館の見学、フェラーリ専門のカロッツェリア（整備工場）の見学、異国文化に関わる研修では、ローマ、ヴァチカンを巡る充実した研修旅程にまとまった。

表1 海外研修旅行実施旅程

	月 日	都市名	交通機関	時間	スケジュール	食事
①	8月29日 (水)	セントレア 発 フランクフルト 着 フランクフルト 発 シュツットガルト着	ルフトハンザ LH737便 ルフトハンザ LH132便	10:10 15:30 17:10 17:50	空路 中部国際空港からルフトハンザドイツ航空で フランクフルトを経由しシュツットガルトへ 到着後ホテルへ 【シュツットガルト泊】	昼✚ 夕○
②	8月30日 (木)	シュツットガルト滞在	専用バス	午前 午後	ホテルで朝食後 専用バスでベンツ博物館へ ベンツ博物館見学 昼食後 ポルシェ博物館見学 見学後 市内観光及び自由散策 【シュツットガルト泊】	朝○ 昼○ 夕×
③	8月31日 (金)	シュツットガルト発 ミュンヘン 着 ミュンヘン 発 ローマ 着	専用バス ルフトハンザ LH1850	8:30 12:00 19:25 21:00	ホテルで朝食後 専用バスで ミュンヘンへ 昼食後 BMW博物館見学 見学後 市内観光及び自由散策 空路 ミュンヘンからルフトハンザドイツ航空でローマへ 【ローマ泊】	朝○ 昼○ 夕✚
④	9月1日 (土)	ローマ 滞在			ホテルで朝食後 半日ローマ市内観光 ヴァティカン美術館 システィーナ礼拝堂 コロッセオ サン パオロ フォーリ レ ムーラ大聖堂を巡り 午後、フリータイム 【ローマ泊】	朝○ 昼○ 夕×
⑤	9月2日 (日)	ローマ 発 ボローニャ 着 ボローニャ 発 マラネロ 着	列車 9410ES	08:45 11:02	ホテルで朝食後 列車でボローニャへ ボローニャ駅到着 バスでエンツォの生家, 併設Museo見学 【マラネロ泊】	朝○ 昼○ 夕○
⑥	9月3日 (月)	マラネロ 滞在			ホテルで朝食後 ランボルギーニ フェラーリ工場 カロッ ツェリア (トニーオート ザナーシ) 見学 ムセオフェラーリ見学 IPSIA訪問 【マラネロ泊】	朝○ 昼○ 夕○
⑦	9月4日 (火)	ボローニャ 発 フランクフルト 着 フランクフルト 発	ルフトハンザ LH283便 ルフトハンザ	10:00 11:45 14:10	ホテルで朝食後 空港へ 空路 ボローニャからルフトハンザドイツ航空でフランクフルトを経由し 帰国の途へ	朝○ 昼✚ 夕✚
⑧	9月5日 (水)	セントレア 着	LH736便	08:35	中部国際空港到着	朝✚

3. 参加募集

海外研修旅行の参加募集人数は25名とした。研修旅行に対する保護者の理解を得るために、2月下旬に新生及び新2年生の保護者宛に案内を郵送した。3月下旬には募集用案内のカラーポスターを作成し、各教室及び掲示板、主要建物に掲示し、受付・相談窓口も告知した。

4月3日の入学式後、新生の保護者にむけて参加募集案内を行い、仮申し込み3名を得た。4月10日に第1回説明会を実施し、5月末までに計6回の説明会を開催した。また、6月3日の教育懇談会においても保護者を対象に研修旅行の説明を行った。

参加者の確定をしなければならない時期となったが、仮申し込みでの希望者は18名であった。しかし、燃油サーチャージを含めた参加費が思いのほか高くなり、正式申込みをした最終参加者は自動車工学科1年生2名、2年生5名、専攻科車体整備専攻生8名の合計15名となり、募集定員には届かなかった。その後、参加予定者を対象に説明会を7月12、18日の2回行った。また、保護者にも最終確認のため研修旅行ガイドブックと出発案内を旅行社経由で研修旅行開始の約10日前に発送した。昨今の経済不況等の影響で、年々参加者は減少傾向にあったが、今回は昨年度実績を大幅に上回ることができた。

4. 研修旅行風景

8月29日：第1日目

午前8時10分に中部国際空港に集合し結団式(写真1)を行った後、中部国際空港からフランクフルトへ向けて午前10時10分(日本時間)に飛び立ち、約12時間の長いフライトを体験し、更にフランクフルトを経由しシュツットガルト空港に着いたのは、現地時間の午後6時00分(日本との時差は7時間)であった。その後、専用バスでシュツットガルトにある宿泊ホテル(写真2)



写真 1



写真 2

に移動した。夕食まで少し時間があつたことと、学生からの要望もあつたので、飲み物や軽食の買い出しのための自由時間をとつた。初めて海外旅行をする学生が多かつたが皆、積極的に行動していた。また、出入国や長時間のフライトでもトラブルなく過ごせたことは、幸いであつた。

8月30日：第2日目

朝、ホテルより専用バスでシュツットガルト市内にある、メルセデス・ベンツ博物館に向かつた。博物館到着後、建物の前で集合写真(写真3)を撮影したのち、建物の中へと進んだ。内部は9つのフロアからなり、最上階から螺旋状の通路を下層へ下つて見学する仕組みとなつていた。120年の歴史をもつ自動車メーカーだけあつて、展示物や展示車両の多さに圧倒された。この博物館だけで、自動車の歴史のすべてを知ることが出来るであろう。学生たちも、真剣な眼差しで展示物を見ていたが、一番興味を示していたのは、併設されているディーラーの新型スポーツカーであつた。館内の様子を写真4に示す。ベンツ博物館を見学後、近くのレストランで郷土料理を楽しんだ。次に、ポルシェ博物館へ向かうため、シュツットガルトの北側に位置するツッフェンハウゼンに移動した。ポルシェ博物館(写真5)は、2009年にリニューアルオープンしたもので、



写真 3

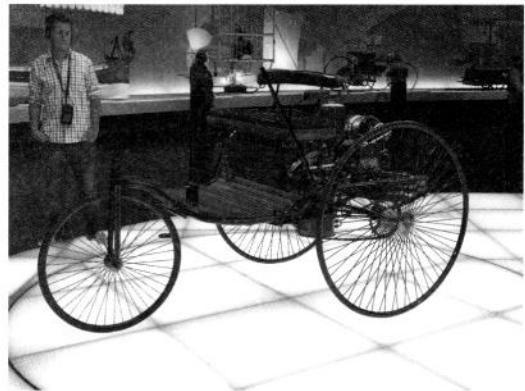


写真 4



写真 5



写真 6

外観は宙に浮いたようなモダンな建物であった。中に入ると、スポーツカー専門メーカーだけに、古くからのレーシングカーが、所せましと並んでいた。マニア延髄の代物ばかりであり、好きな学生はかなり興奮気味であった。館内の様子を写真6に示す。見学後は市内中心地へ移動し、夕食までの数時間を自由行動とした。安全な街でもあつてか、学生はショッピングを楽しんだり、ワイン祭りの出店を覗き込んだりと、言葉の壁があるものの、積極的に行動していた。夕食後、ホテルに戻り充実した2日目を終えた。

8月31日：第3日目

朝、専用バスでこの日の目的地である、BMW博物館へ向かった。シュツットガルトからおおよそ3時間の道のりを経て、バイエルン州の州都ミュンヘンに到着し、市内のレストランで昼食をとった。食事は、ドイツに来てから定番となっているジャガイモと玉ねぎ、ソーセージである。あらためて、日本の食文化の素晴らしさを感じた。食後、再びバスで20分ほど走り、BMW本社の真横にある博物館に到着した。建物の外観は、本社ビル(写真7)の奇抜さに目を惹かれる。ヨーロッパは、デザインにこだわりを持っていることを実感させる。中に入ると、博物館の専属ガイド(写真8)が館内を案内してくれた。しかし、言語が英語であり、日本人ガイドの方に再翻訳していただかないといけなかった。単純にオーディオガイドのほうが学生には良かったかもしれない。BMWは航空機エンジンメーカーとして始まり、戦前から二輪を製造していただけあって、貴重なオートバイがたくさん展示してあった。展示方法がユニークでシューズショップのディスプレイのように、壁面の棚に車両を展示していた。四輪車の生産開始が比較的遅かったことと、モデルチェンジのサイクルが長いので、四輪車の展示車両は多くはなかったが、マイクロカーで有名なイセッタや、BMWモータースポーツのレース車両などを間近に見ることができた。2時間程博物館で過ごし、次の訪問国イタリアへの移動のためミュンヘン国際空港へ向かった。19時25分発のローマ行きの飛行機に搭乗し1時間半ほどでローマに到着した。この日はホテルの部屋



写真 7



写真 8

割りをして解散となった。

9月1日：第4日目

この日はホテルからバスでヴァティカン市国へ。バスの中で、ツアーガイドの方からイタリアで過ごすにあたり、注意事項を話されたが、中でも特にスリには気を付けろと指導をうけた。週末で、観光客も多いことから、ジプシーも沢山いるらしい。8時30分頃到着し、まずはヴァティカン美術館に入場した。学生は日本人ガイドからの説明に熱心に耳を傾け、壮大な天井画やモザイク画の説明に聞き入っていた。その後はシステリーナ礼拝堂を見学した。ここはミケランジェロが描いた創世記などの大天井画、最後の審判の壁画で有名であるが、礼拝堂内部での私語が禁じられており、入館前にパネルで壁画の説明を受けた。聖書をモチーフに描かれているが、ガイドの方が人気アニメのエヴァンゲリオンとの関連についても話されたため、学生たちは興味津々と壁画に見入っていた。その後、隣接するサン・ピエトロ大聖堂(写真9)の見学を行い、カトリックで一番大きな教会の荘厳な造りに皆、見入っていた。ヴァティカン美術館中庭での集合写真を写真10に、サン・ピエトロ広場を写真11に示す。



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12



写真 13



写真 14

ヴァチカン市国を後にし、バスでのローマ市内の観光をおこなった。途中、コロッセオ（写真12）や凱旋門、サン・パオロ・フォーリ レムーラ大聖堂を巡った。ホテル近くのレストランで昼食を取ったのち、午後はフリータイムとなる。バスでの市内観光では物足りない学生が多く、各々でコロッセオやトレビの泉、スペイン広場（写真13、14）などへ出かけて行った。集合時間には全員ホテルに無事帰着しており、沢山のお土産を持った者や、買ったばかりのブランド品を身に着けている者もあり、ローマを満喫した様子であった。

9月2日：第5日目

この日はローマからマラネロへ移動となるが、途中のポローニャまでユーロスター（写真15）を利用する。ローマのテルミニ駅よりポローニャ中央駅まで2時間15分程の列車の旅となった。途中の停車駅も1駅しかなく、移動時間の短縮には有効であるが、大きな荷物を置くスペースが少なく、座席も、バラバラに座ることとなり、一人で離れた席に座った数名の学生は不安だったかもしれない。ポローニャ到着後、専用バスでモデナへ移動した。1時間程走り、モデナの町に到着した。12時を過ぎており、すぐさま昼食会場のレストランへ向かい、モデナ料理のバイキングを戴いた。名物のバルサミコ酢が苦手な学生もいたようだった。昼食後、2012年3月10日にオープンしたばかりのエンツォ・フェラーリの生家博物館（写真16）へ移動した。この博物館はフェラーリの創業者エンツォ・フェラーリの生家跡地に作られ、エンツォが生前愛したカナリア・イエローの屋根が特徴である。イタリア・モデナに実父が板金工を営んでいた工場兼住居を改装したもので、館内には初期のフェラーリやアルファロメオのレースモデルなど、エンツォの縁の車や愛用品などの展示がありどちらかと言えば、マニア向けの博物館であった。フェラーリを深く

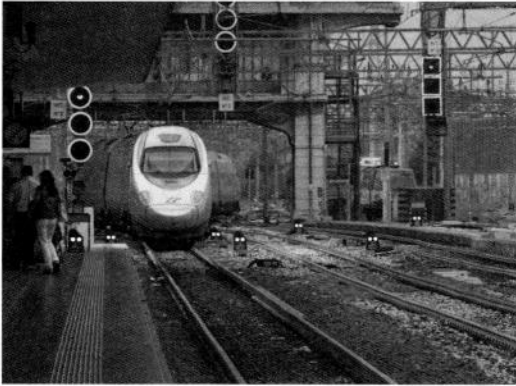


写真 15

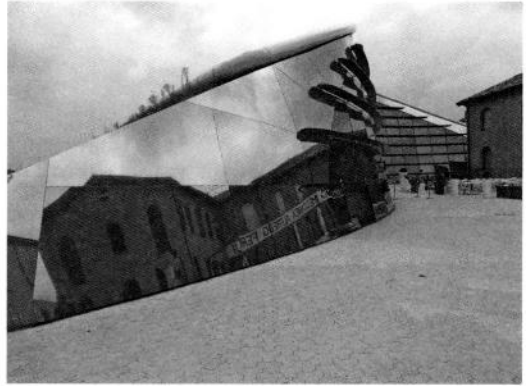


写真 16



写真 17



写真 18

知りたければ訪れるべきである。館内の様子を写真17に示す。1時間程見学したのち、次の研修場所であるマラネロへ移動した。

本日二つめの博物館、フェラーリ博物館（写真18）へ。毎年恒例の博物館だが、世界中の憧れの車だけあって、素晴らしい展示物であった。F1はもとより、耐久レースで戦った車、コレクター延髄の車、最新のフェラーリなど見るものを魅了するばかりの車たちであった。博物館を見学後、しばらく自由時間とし、学生たちは近くのショップなどで、フェラーリグッズのお土産を購入したり、街並みを散策したり、中にはフェラーリの同乗試走をして、楽しんでいたようだ。夕方、フェラーリ関係者も宿泊するドムホテルへチェックインし、同ホテルで夕食を楽しんだ。夕食はかなりのボリュームで、学生が初めて食べ残したのではないか。ローマからの長距離移動も含めて中身の濃い1日であった。

9月3日：第6日目

この日は、海外で研修できる最後の日である。最初の目的地であるフェラーリ協力工場のザナシーへ向かう。以前は短期留学の研修先でもあったが、フェラーリとの関係が深くなり企業秘密



写真 19



写真 20

も多いため、今回、見学は困難かと思われたが配慮頂き見学することができた。工場内はすべて撮影禁止であったため、様子を写真に残すことは出来なかったが、オールドフェラーリのレストアから日本ではまだ発売されていないフェラーリF12などを見ることができた。フェラーリ社にとっても特別なパートナーだと実感した。ザナシーを後にし、次の目的地である、フェラーリ専門整備工場のトニー・オート（写真19）へ。こちらは今も短期留学の研修先であり、とてもフレンドリーな対応であった。学生諸君は部品庫の奥まで覗きこんで、興味津々の様子であった。その様子を写真20に示す。

次に、本研修旅行の目玉であるフェラーリ本社工場の見学を行った。工場入口のロビーで集合写真（写真21）を撮り、工場見学者用の待合室となるホスピタリティブース（写真22）へ移動して、ガイドの方から注意事項の説明を受けた。工場内撮影禁止なので、カメラもそこに預けることとなった。我々以外に、2名のヨーロッパ人がおり、多分フェラーリのオーナーになる人だと学生が羨んでいた。ちなみにガイドの方は日本人女性でフェラーリの社員であった。工場の中は



写真 21



写真 22

非常に明るく清潔な空間であった。フェラーリというハンドメイドに近いイメージがあったが、フルオートメーション化されており、日本の自動車メーカーと変わらない感じである。しかし、建屋がガラス張りでデザインが凝っているため、こちらの方が未来的と感じた。学生達は、シリンダー・ヘッドに取り付けるノック・ピンを液体窒素を使い、冷やし嵌めしているロボットなどをまじまじと観察していた。最終組み立てラインで仕上がってくるV8フェラーリを羨望の眼差しで見つめながら、およそ1時間半の工場見学が終了した。

フェラーリ社を出て次の研修場所である、IPSIAへ徒歩にて移動した。IPSIAではマルゲリータ校長とエミリア副校長にお出迎え頂いた。実習場に入ると、レバンテ計画でお世話になったフィリッポ先生が、IPSIAで製作したソーラーカーの説明をして頂いた。イタリア人らしくデザインにこだわっており、クジラをモチーフにしたものであった。その様子を写真23に示す。しばらく見学した後、近くのレストランで校長先生等を交えて昼食を摂った。食後には、マルゲリータ校長から全員に一人ずつ手渡しで研修修了証を頂いた。(写真24)

午後から最後の研修場所である、ランボルギーニ博物館(写真25)のあるポローニャへ移動し



写真 23



写真 24



写真 25



写真 26

た。ランボルギーニは際立ったレース活動もなく、車種や生産台数も他のメーカーと比較して少ないものの、車のデザインに関しては他を圧倒するものがある。展示物は少なめではあるが、コンセプトカーやカスタムされた車両が目を引いた。フェラーリよりも好きだという学生も少なくない。小規模ながらも価値のある博物館であった。館内の様子を写真26に示す。1時間ほど見学してモデナへ戻り、夕食までの時間をフリータイムとした。夕食はホテル近くのレストランへ行き、フェラーリ校のエミリア副校長を交えて研修旅行最後の晩餐となった。

9月4日：第7日目

今日は帰国の日である。ポローニャ国際空港、午前10時発の飛行機に搭乗するためホテルを立った。地元のテレビ局でルフトハンザ航空がストライキを行うとの情報を得ていたが詳しい事情も分からず、空港に着いてから対応策をとることにした。飛行機に乗ることができなければ、最悪1日延泊することを覚悟しなければならない。空港に着くと、搭乗予定のフランクフルト行きの飛行機はキャンセル（写真27）となっていた。さらに、カウンターにて尋ねたところ、フランクフルトから名古屋へ向かう便もキャンセルであるらしい。なんとか帰国できるよう空港で交渉したところ、ミュンヘン発、成田経由セントレア行きの便に乗れそうだが、ミュンヘン—成田間が2便に分かれるかもしれないとのことであった。しかし、全員同じ便で帰国することが可能となり、事なきを得た。その様子を写真28に示す。今までの旅程中、一度のトラブルも無く、かつ不確定であった場所も全部見ることができたので、最後にこのような事態になったことは残念であった。だが、この様なトラブルに見舞われたことは学生にとって、いい経験になったかもしれない。成田での長時間の待ち時間も含め、丸24時間ほどの移動時間となったが、9月5日の午後6時過ぎにセントレアへ無事到着した。長時間の移動で学生諸君は大変疲れたと思うが、皆無事に家路に着いた。

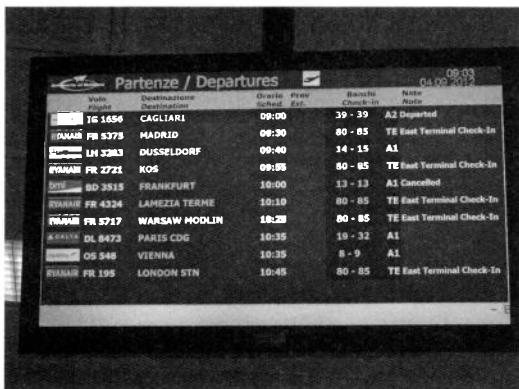


写真 27



写真 28

5. 考 察

今回の研修旅行では、昨年10月に海外研修・留学委員会の新委員で募集定員及び研修内容・場所の決定と研修期間の検討を行った。3月末から本格的に学生募集をおこない、15名もの参加者を募る事ができた。学生数が減少したことを考慮すれば、まずまずの結果である。潜在的に希望者はいると思われるが、今後はその掘り起し方法について検討しなければならない。

当初予定していた日程を、自然災害や現地の催事によって変更せざるを得なかったが、それでも、魅力ある旅程を組み立てることが出来た。研修旅行の費用決定については、燃油サーチャージが予想以上に高く、団体割引が以前のようなメリットがないので、参加者の金銭的負担が昨年より増えてしまった。その為、辞退者が1名出てしまったことが残念である。課題として、燃油代金を含めた正確な旅行費用を早い時期にアナウンスすることが必要である。

最近では、情報通信の進歩が目覚ましく、どんな場所でもネット通信ができる。今回、航空会社のストライキもインターネット上でアナウンスされていたようだ。今後、研修旅行に出かける際には、スマートフォンやパッド型PCを携帯したほうが、情報収集を素早く行うことができ、リスク回避に有効だと考えられる。これからも、いろいろなりリスクに対応できるような仕組みを構築すべきである。

6. ま と め

今年度はサブタイトルとして「ヨーロッパの文化と自動車にふれる旅」と題して旅程を組んだ。自動車に関するものとして、自動車博物館が6か所、整備工場2か所、フェラーリ工場の見学と今までの中で、最多の施設数だと思われる。文化についても、シュツットガルト市内の散策や、世界遺産の宝庫であるローマ、ヴァチカンなど、世界でも有数の名所を訪ねることが出来た。システィーナ礼拝堂で、学生たちが口をあけたまま天井を見上げていた姿が、今も思い出される。日常の部分でも、ホテルの従業員の方とコミュニケーションを取ったり、ショッピングでディスカウントに挑戦したり、ローマのピザ店では、常連客のように店員の方と仲良くなった者もいた。旅行中は怪我やトラブルもなく、スケジュールは日本で旅行しているかのように、旅程を消化することができた。最終日に帰国便のキャンセルという問題が発生したが、学生は我々の指示に従い、落ち着いて行動してくれた。研修旅行の成果が表れた証である。

今回、研修旅行に参加した学生は、十分にヨーロッパの文化と自動車にふれる事ができた。

最後に、海外研修旅行を実施するにあたり協力を頂いた本学の教職員の方々、研修先の調整と引率をして頂いた学園本部の蜂須賀氏には、深く感謝の意を表します。

7. 参 考 文 献

- 1) 林文明, 藤田英樹, 鈴木泰成, 木下茂, 松浦克至: 中日本自動車短期大学論叢 第40号 (2010), 2009年度海

森 光弘・藤田英樹・林 文明・木下 茂・松浦克至：2012年度海外研修旅行の報告

外研修旅行の報告p.121-128